

深川木場の歴史と文化④

木場で働く人々

江東区深川江戸資料館

木場では、川並や木挽とよばれる職人がたくさん働いていました。彼らは、材木問屋と関わりを持ちつつ、頭を中心としながら、独立した存在として木場を支えてきました。ここでは、木場で働く人々について、実際に働く人々のお話を参考にしながら、職人たちの日常的な姿を浮き彫りにします。

(1) かわなみ 川並

日本は、家屋をはじめ生活用具の様々なものが木で作られてきました。そのため材木のいかだ筏組みや筏流しなどに従事する職業も全国各地にみられ、筏衆・川方・筏屋・筏乗り・川かわとび鳶・川引きなどと呼ばれてきました。

木場の筏師は、特に「川並」と呼ばれ、材木を組んで運搬するだけの他の筏師と区別してきました。川並のはっきりした語源や起源はわかっていませんが、江戸初期には既に存在していたと思われます。川並は全国各地の材木を選別し、仕分けして貯木場で管理するとともに、材木の寸検・材質の選定による値踏みを行います。また、売れた材木を仕入先まで筏に組んで運搬する作業も行ないました。材木の知識は、材木問屋の人々よりもよく知る川並がいました。材木は、商品であるため、見た目よく組むことが要求されました。筏の組み方ひとつで値を左右したのです。運搬の際の組み方も、材種により様々でした。また、江戸時代の川並は幕府の御船手組に属していて、江戸城をとりまく河川の管理や治安の維持にも携わっていたと言われています。

川並の仕事用具一式を、川並の頭・林栄次郎氏（㈱大洋筏代表）より、江東区教育委員会が寄贈を受けました。その一部を紹介します。

《はさみ尺（差金）》

目盛りが尺寸とセンチのものがあります。断面（切り口）以外の長さを測るときに使います。川並の押え方（測り方）次第で値が変化します。



《竹差し》 L字状の金具がついています。材木の断面（切り口）の長さを測るときに使います。水中の材木を測るものは、金具が長くなっています。



《巻尺》 携帯に便利。筏の上では、巻尺の中身の部分を腕に巻きつけて使います。

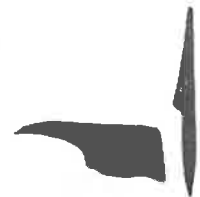
《マタカン》

材木を組むための留め具。昭和30年ごろまでは縄で組んでいました。釘がさびるため、材木にシミがついてしまうのが欠点です。



《鳶口》

名古屋鳶は、鳶口のとがった頭の部分が別があり、後づけされています（写真）。関東は一緒についています。



《小鳶》

小口を削って色味を見ます。

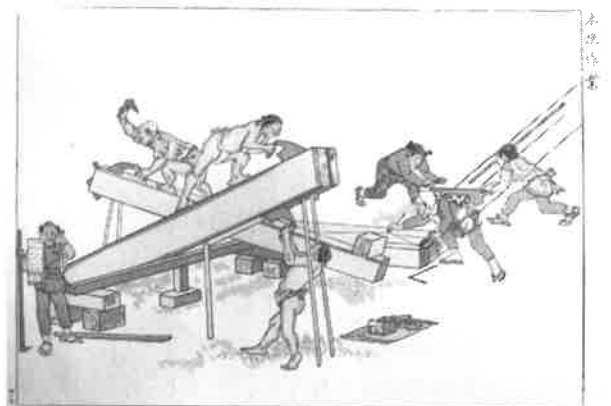
《ガリ引き》

材木に記号、木の寸法を書くための道具。

《スパイク》 ワラジやイタゾウリ、足袋が使われていましたが、外材が入るようになると表面が滑りやすく、スパイクも使用するようになりました。

(2) こびき 木挽

木挽は、丸太や角材を柱や板材などに切り分ける仕事をする職業です。木場の材木問屋にはそれぞれ出入



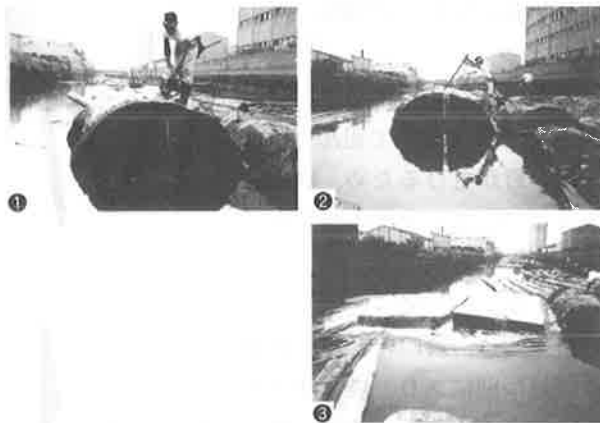
「木挽作業」『木場名所図絵』（昭和2年）。解説文には「旧来の大切、墨掛、林掛、木挽の図なり」とあります

りの木挽がおり、大きなところでは2、30人の木挽職人をかかえています。明治時代後半になると機械製材が普及し、



山本稚子氏撮影 昭和34、5年に撮影された木場の木挽職人のようす

さらに、近年では鉄筋コンクリートの増加や原木輸入の減少といった理由も加わり、江東区新木場で働く木挽職人はわずか4人となりました。現在は木挽職人による製材は、特に高級な材木など特殊な場合に限られています。写真は江東区白河に住む現役木挽職人、斉藤末蔵氏が、大鋸おわがを入れている作業を写したものです。



(3) 芸能

江東区に伝わる伝統芸能として「深川の力持」「木場の角乗り」「木場の木遣り」「富岡八幡宮の手古舞」「砂村囃子」があります。この中で、力持、角乗り、木遣りは「仕事の場から生まれた技」であり、角乗りと木遣りは、木場の川並の衆によって伝えられてきました。現在ではともに、東京都の無形民俗文化財に指定されています。

<木遣り>

木遣りは数人の川並衆が 竿の先についている鳶口を材木に引っ掛け、一斉に引き上げる際の掛け声に即興的な歌や流行歌などを取り入れた労働歌でした。材木の大きさや形によって力の入れ方が変わるため、それに応じて調子の速い木遣り、ゆっくりとした木遣りなどが歌われました。川並には通人が多く、彼らの歌う木遣りは、木場に響く掛け声となり、それを聴く者をうっとりさせました。昭和に入り仕事内容の変化などにより仕事場で歌われることはなくなっていきまし

た。

代表的なものに、「大間木遣り」「中間木遣り」があります。『深川区史・下巻』（大正15年）より引用してみます。

◎「大間木遣り」

呼び音頭「え>、え>、乗つたあ、ようい> と。」

受け「え>よん、い>よん、い>え>。」

呼び「え>乗つたる木を、引いてくれ。」

受け「え>引けやあ、え>。」

呼び「梃え>。」

受け「え>ほおん。」

呼び「三尺ばかり、引いてくれえ。」

受け「あ>梃え>、い>え>え、ほんうん や>ねえ>。」

◎「中間木遣り」

呼び音頭「よお>んやあ。」

受け「やあれ、きのはあなようい>よん。」

呼び「それやそうなありいよん。」

受け「え>、しやくれよん。」

<角乗り>

角乗りは、川並が掘割の上で材木を扱いながら遊戯的に行なったのが初めといわれています。水の中に長さ数メートルの角材を浮かべて、その上に演者が乗り、ため竿でバランスをとりながら、材木を両足で回転させ曲芸を演じます。角材を水に浮かべると木材の角が水面に浮き出ますので、角材の上に乗るには、角の上に乗らなければなりません。また、角乗りには、角材、ため竿のほか、駒下駄こまげた、駕籠かご、はしごさんぼう、から傘などの道具が必要で、「地乗り」「駒下駄乗り」「はしご乗り」「かわせみ」「三宝乗り」「戻り駕籠乗り」などの演技があります。



「子供あそび角乗りの図」歌川国芳 江東区教育委員会